真狩村指定文化財

資料名	赤坂奴（あかさかやっこ）	区分	指定無形民俗文化財

写真・スケッチ

説　明　（商品名，製造所，使用方法，歴史，時代背景　など）

真狩赤坂奴は、毎年行われる真狩神社例大祭で、村内各所を練り歩く奴行列として親しまれてきました。

奴行列の発祥は、江戸時代の参勤交代とされています。武家の下男として外出する主人に付き、飾り槍といった武具や着替えをいれた挟み箱などを運んでいた奴は、格式を演出する大名行列で歩行するうちに奴振（やっこぶり）と呼ばれる独特の所作を行うようになりました。江戸時代中期から後期の参勤交代では、威厳を保ちながらも極力経費をかけずに済むよう、必要な時だけその土地から人を調達して臨時の家来とし、大名行列の体裁を整えるようになったため、その土地ごとに雇われた人たちの組織化が進み、地名を付けた独自の奴振ができたといわれています。「赤坂奴」は江戸屋敷が多かった赤坂に由来していると考えられていますが、現在の東京都港区赤坂周辺に現存する奴行列はないそうです。

赤坂奴が真狩村にどのような経緯で伝わったのかは定かではありませんが、例大祭の神興行列に初めて赤坂奴が加わったのは、昭和34年（1959年）のことです。当初は真狩駐在所の渡辺勝美巡査が指導に当たっていたとの記録が残っています。二十名ほどの奴たちは、揃いの半天、手甲（てっこう）、脚絆（きゃはん）、前掛けに身を包み、槍や挟み箱を手にして隊列を組み、女性の奴による「おたーちー」という掛け声を合図に、ゆっくりと歩みを進めます。神興行列に彩りを添える真狩赤坂奴は、村の風物詩となりました。平成十年頃から継承団体である青年団だけでは行列の人数を賄うことができなくなり、高校生を動員したり、休止することが続きました。真狩赤坂奴は女性の参加のほか、村外からの参加希望者を受け入れるなど柔軟性を持っています。真狩村の歴史に育まれた独自色が、伝統文化に真狩らしさを添えています。

（平成18年5月30日、真狩村指定文化財　無形民俗文化財に「真狩赤坂奴」が指定　　継承団体／真狩村青年団協議会）

出　典　：　後志の文化財